

スタンダール『アルマンズ』 における決闘——(前)

田 戸 カンナ

はじめに

今日では決闘の風習はほぼ完全に失われているため、はじめに決闘について確認しておく、近代フランスの決闘とは何らかの侮辱を受けて名誉を傷つけられた場合に、相手にその侮辱の償いをさせるべく、武器を使ってその相手と双方の合意のもとに戦うことである。戦いは一対一で行われるのが普通であるが、時によっては複数対複数で行われることもあった。

スタンダールはその生涯において何度か危うく決闘しかけたのみならず、実際に決闘した人である。また、決闘に関する法案を数回起草していることが示しているように¹、彼は決闘に少なからぬ関心を抱いていた。彼の作品世界においては作中人物たちは決闘し、その中にはファブリス、ジュリヤン、オクターヴ、リュシヤンといった、主要小説の主人公を数えることができる。ところが、スタンダールの人生や彼の作品世界における決闘はお決まりの研究テーマには程遠く、これまでのところあまり研究されていない。スタンダールの世界の決闘を真正面から一貫して考察した研究としてはわずかに、モイア・ロングスタッフによる『『赤と黒』における決闘の倫理学と殉教の冠』（『スタンダール・クラブ』第72号掲載²）とピエレット・パヴェ＝ジョルによる「スタンダールの決闘」（『HB』第2号掲載³）が挙げられるくらいである。

本稿では中でも、スタンダールの第一小説『アルマンズ』（1827年刊）に焦点を合わせ、第21章で語られる、主人公オクターヴのクレヴロッシュ侯爵との決闘を考察したい⁴。このことはスタンダールが小説家としての目的をいかに達成していったのか、その創作の一端を解き明かすことにつながるだろう。

読者を楽しませる物語

ダニエル・サンシュが端的に述べているように、「スタンダールにおいては語られる物語（l'histoire racontée）が大いに重要であることは誰しも否定しはしないであろう⁵」。比較的近年、スタンダールの世界における物語そのものに改めて真正面から光が当てられ、その重要性が立証されたところである。サンシュは1995年11月の『ポエティック』誌に発表した論文において、スタンダールの世界では物語が引き起こす効果、印象の方が物語そのものよりも大切であるというモーリス・バルデーシュの見解を「誤り」であるとして、「スタンダールの第一の『目的』はたしかに『一つの物語を語ること』（« conter une histoire »）である⁶」と言い切っている。これは「私は物語らねばなりません。ところが、物語は私にとって実にくらげざるものなのです⁷」と書き、また「小説の物語、冒険は私には全くどうでもいい⁸」と言い、「物語に対する嫌悪⁹」を標榜するフローベールと顕著な対照をなしているのは言うまでもない。

その結果スタンダールにあっては、サンシュが述べるように、小説はもちろんのこと、旅行記、攻撃的論文、エッセイなどにおいても、一つの作品の内部でレシ (récit) は増殖してゆき、スタンダールの世界は「巨大なレシの帝国¹⁰」となりおおせているほどである。このレシの増殖は、略述と省略を結び合わせることで一センテンスの中に数多くのエピソードを「沈殿させる¹¹」というマイクロ構造のレベルにおいても、また「語られる物語を構成する出来事とエピソード¹²」が数多く存在したり、主要なレシの内部に二次的レシが生み出されるというマクロ構造のレベルにおいても見られる。サンシュは『アルマンズ』の事例を挙げてはいないけれども、こうしたレシの増殖は二つのレベルとも『アルマンズ』にもはっきりとあらわれている。マイクロ構造のレベルの例としては、「ほどなくしてマリヴェール侯爵は亡くなり、アルマンズとマリヴェール夫人は同じ修道院で修道女になった¹³」という小説最後の一センテンスを挙げることができるし、マクロ構造のレベルの例としては、『アルマンズ』では『赤と黒』におけるジェロニモの話やサン＝ジロの話のような長いレシは存在しないけれども、それでも召使のピエールを投げ飛ばした話やアルマンズの両親の話などを挙げることができる。『アルマンズ』もまた確実に「レシの帝国」の一領土となっていると言えよう。

『ラミエル』のマニュスクリの余白に記されたメモには「人はこのような本を、第一にいくつかの物語、第二にいくつかの面白い物語を得るために開くものである」(On ouvre un tel livre pour avoir : 1° des récits ; 2° des récits amusants¹⁴) とある。また『リュシヤン・ルーヴェン』のマニュスクリに刻まれたメモには「『プレモルの森』には多量の物語がある。[...] ところで、小説の第一のよいところは語ることに、いくつかの物語によって楽しませること [...] でなければならない」(Il y a dans *Les Bois de Prémol* une quantité énorme de récit [...], or la première qualité d'un roman [roman] doit être : raconter, amuser par des récits [...]¹⁵) とある。サンシュはこれらのメモを引き合いに出して、スタンダール自身が物語の重要性を自覚していたことを指摘しているが、オクターヴの決闘についてはそれをモチーフにして、スタンダールが言うところの「面白い物語」が構成されている点にまずは着目したい。決闘はオクターヴが生命を懸けて敵と相対するスリルある一エピソードを構成しており、それまで長い間社交界のありよう、作中人物たちの恋愛を追ってきた読者がいわば気分転換して楽しめるものとなっている。ワートルローの戦い、馬車での逃亡、M*** 伯爵との決闘、脱獄のエピソードなど読者を楽しませるスリルあふれるエピソードを数多く内包している『パルムの僧院』とは異なって、『アルマンズ』には読者を楽しませるレシはそれほどふんだんに盛り込まれているわけではない。この意味においてオクターヴの決闘のエピソードは重要な一要素、スタンダールが「小説の第一のよいところ」と呼ぶものを実現させるための重要な一要素となっている。

しかし、『アルマンズ』においてこの決闘の役割は読者を楽しませることに終始しはしない。つまり、オクターヴの決闘には読者を楽しませること以外にも重要な役割があてがわれているのであって、次にこの点を見ていきたい。

当代風俗の活写

王政復古期の決闘に目を遣るならば、我々はオクターヴの決闘に当代風俗を見ることができる。今日からはなかなか想像がつかないが、たかだか二百年ほど前の時代、つまり王政復古期には、フランスでは決闘が頻繁に行われていた。このことは、1819年から1820年にかけてのフランス社会を描い

たバルザックの小説『ゴリオ爺さん』の中のヴォートランの次のことばが如実に示しているところである。

「[...] パリでは毎朝誰かが決闘をしているんじゃないのかね¹⁶？」

スタンダールも王政復古期のフランスにおける決闘の多さには着目せざるをえず、その事情をイギリスの読者に報告している。テオドール・ルクレルクの諺劇を取り扱った『ロンドン・マガジン』掲載記事のオリジナル（1825年4月13日付）には、「このように買収されたフランス人は軽蔑されるのを常に恐れている。自分が勇敢だと思っており、辛辣にからかわれるがはやいか、決闘でそれに応える¹⁷」と書かれている。

決闘は王政復古期にこれほどまでに広まっていたのであるが、それは単なる形式的、儀礼的な戦い、あるいは戦いの真似事であったわけではなく、文字どおり生命の危険を伴うものであった。19世紀初期のイギリスを見ると、二百件の決闘のうち死者十四人、負傷者三十三人が確認されているという。ここから死亡率は約十四回の決闘で一人、負傷率は約六回の決闘で一人という数字がはじき出されるが、イギリスでは原則としてピストルの発射が両者とも一回ずつであったのに対して、フランスではそのように限定されておらず何度か撃ち合うことも多かったため、死亡率、負傷率はさらに高かったと推定される¹⁸。

もちろんこのような巷の頻発する危険な行為に対して当時の政治家は全く無関心であったわけではなく、決闘を抑制するための試みもなされており、例えば1819年には下院で、次いで1820年には貴族院で決闘に関する法案が提出されている。しかしながら、これは結実することなく終わってしまう。こうした立法上の不備に加えて、裁判にしても決闘を食い止めるだけの力はなかった。というよりはむしろ、裁判は決闘を助長していたと言っても過言ではない。決闘に関しては多くの訴えがなされたが、決定的な法がないために判決は被告人に有利な方に展開し、裁判は被告人を無罪放免として終わるのが普通というありさまであった。法、裁判上の不備も相俟って王政復古期には決闘は多発していたわけである。

では、具体的にはどのような人物が当時決闘を行っていたのだろうか。まず、軍人の決闘が多く見られたことを指摘しておかなければならない。スタンダールはJ.-P. R. キュイザン著『ブーローニュの森での決闘と自殺』に関して書評を試み、その中で親衛兵の決闘に言及している（1823年2月12日付）。

決闘について言うと、王と王弟殿下の親衛兵はみな過激王党派であり、からかわれるのを恐れていて、兵舎でピストルを撃ちフェンシングをして生活を送っている。これが現今の決闘の主たる源である¹⁹。

具体的に軍人による決闘の例としては、元連隊長のバルビエ＝デュファイが親衛兵の士官であるサン＝モリ連隊長を殺し、さらにはモンテレジエ將軍を負傷させたことが記録に残っている。ワーテルローの戦い後休職になり半俸を受け取っていた元ナポレオン軍士官、すなわち「ドゥミ＝ソルド」(demi-solde)の決闘が多かったことも王政復古期の決闘の特色である。またこの時期には軍人、ドゥミ＝ソルドのみならず、政治家、ジャーナリストといった職業の人々が果敢に戦いに挑むのも見られた。議会での主義主張は議員の、新聞紙上での意見表明はジャーナリストの決闘を生んだ。自由主義派の傑出した演説家であったフォワ將軍はオクターヴが会えずに終わったことを悔やんでいた人物

であり²⁰、なおかつスタンダールが「幸福な少数の人々」の一人に数える特筆すべき人物であるが、この将軍は議会での演説がきっかけとなってコルデー氏と戦っている。一方、王党派の機関紙『ドラポー・ブラン』の執筆者アルフォンス・ルイ・デュドネ・マルタンヴィル（1776～1830）は悲劇『ゲルマニクス』を批判したことから、作者アントワーヌ・ヴァンサン・アルノーの息子とブローニュの森で戦い傷を負った。

王政復古期の決闘を身分の観点から見ると、貴族や平民が戦いに挑んでいるのが分かる。先に挙げた例ではモンテレジエ将軍は子爵であるのに対して、フォワ将軍やマルタンヴィル、アルノーは平民である。『赤と黒』ではクロワズノワ侯爵はタレル伯爵にからかわれたのが原因で決闘し、二十四歳にならない若さで命を落としているし²¹、貴族のヴェリエール町長レナール氏には1816年に決闘しそうになったいきさつがあり²²、この町長は匿名の手紙の件でヴァルノと決闘しようともしていた²³。「百姓²⁴」の息子ジュリヤンはラ・モール侯爵の秘書となって間もない頃、ボーヴォワジ従男爵と決闘して腕を負傷しているし²⁵、バルザックの世界では、アングレームの小貴族の息子、ウジェーヌ・ド・ラスティニャックはヴォケー館の庭で脱獄囚ヴォートランと危うく決闘しそうにもなっている²⁶。そのヴォートランのさしがねで、銀行家ターユフェールの息子フレデリックは旧近衛将校、フランケシーニ伯爵と決闘して、額に剣を受け亡くなっているという具合である²⁷。

このように王政復古期には貴族、平民の決闘が見られたが、文字どおり生命の危険が伴う決闘がこの時期になぜかくも頻繁に行われていたのだろうか。それには先に触れた法の問題、裁判の問題も大きく絡んでいるし、さらに帝政から王政に政治体制が大きく変わったこの時代には、王党派、自由主義派といった政治的立場の相違が個人間の対立を招きやすかったとも考えられる。また、この時期の決闘の多さをロマン主義の観点から説明することも可能である。山田勝はロマン主義とロマン主義時代の決闘には、中世趣味、啓蒙と理性への反逆、歪曲の美学などの共通点があることを指摘しているが²⁸、たしかに王政復古期の決闘は中世に行われていた個人間の戦い、決闘裁判あるいは馬上槍試合の延長線上に発達したと考えられ、これはロマン主義の特色の一つである中世趣味と重なる。また、ロマン主義とはそもそも啓蒙と理性に対する反逆の運動であるし、決闘もいかに己の名誉が問題となっていようと、殺し合い、傷つけ合いである以上、反理性的行為であると言わざるをえない。さらに廃墟のモチーフやユゴの小説『ノートル＝ダム・ド・パリ』の作中人物、カジモドにもあらわれているように、ロマン主義には歪んだものを描きそれを美にまで高める側面があり、この歪曲の美を、さまざまな決まりのもとに行われ、儀式性に彩られた殺人行為である王政復古期の決闘にみとめることはさして困難ではあるまい。以上に加えて、ロマン主義は個人の主観、感情、情熱を解き放ったという点においても決闘と通ずる。というのも、決闘もまた個人の意志、感情の発露に他ならないからである。言うまでもなく王政復古期は18世紀後半に芽生え、帝政期に確実に姿をあらわしていたフランス・ロマン主義がまさに開花しつつあった時期である。つまり、王政復古期には決闘とロマン主義が共通の精神性に支えられともに顕在化していたのである。

先に「さまざまな決まりのもとに行われ、儀式性に彩られた殺人行為」と述べたが、ここで王政復古期の決闘のルールに注目したい。18世紀中期から19世紀前半は決闘の儀式化が進んだ時期であった。武器も剣からピストルに移行するようになると、決闘者はもはや剣を交えて激しく動き回る必要はなくなり、不動の姿勢で勝負がつくようになり、決闘そのものが簡素化されてくる。こうした簡素化は決闘を儀式化、神秘化することになった。つまり決闘はより多くの約束事、決まり事にのっとっ

て厳粛に行われるようになったのである。「決闘はもう儀式でしかないわ」というマティルドのことばはまさにこのことを示していると言えるだろう。「全ては予め分かっている。倒れた時に口にしなければならぬことさえも。芝の上に横たわって、片手を心臓の上に置いて、敵には寛大な許しを与え、ある麗しき人に何か一言残さなければならぬんだわ。その麗しき人というのは多くの場合空想の人だし、そうでなかったら人に疑われるのを恐れて決闘者が死んだその日に舞踏会に出かけていく人なのだわ²⁹。」

具体的に見ていくと、19世紀前半では名刺を交換したり、決闘の日時場所、武器、介添え人を指定するなど、挑戦そのものも既に決まりにのっとっていた。勝負の時は夜明け、場所はパリならブローニュの森など人けのない所が選ばれ、決闘場における二人の決闘者の間の距離、介添え人の位置なども決められていた。またマティルドが思っているように、決闘者は死ぬその瞬間にも立派に振る舞わねばならなかった。介添え人の役割は極めて重要であると言わなければならない。介添え人は武器を整えたり、太陽光線がどちらか一方の決闘者の目に入って不利になることがないようにするなど、戦いが公正に行われているかを見届ける任があった。また、戦う理由が適切でない場合には決闘者を説得して戦いを止めさせ、力を尽くして和解させるのもその大きな任務の一つであった。さらに介添え人は、決闘が始まった後では、決闘を中止するかあるいは続行するかを決定する権限をも持っていた。バルザックの『金色の眼の娘』においてアンリ・ド・マルセーは友人のポール・ド・マネルヴィルに次のように言う。「もし君が明日戦うのであれば、距離を測って、ピストルに弾を詰めてやるよ。君が規則にのっとって殺されるようにね³⁰。」このマルセーのことばはまさに介添え人の役割を告げている。

ところで、オクターヴの決闘とジュリヤンのそれには共通点がいくつかあることをここで見ておきたい。どちらの場合も侮辱を受けて決闘することを思い付くのは主人公の方であり、彼らは二人とも介添え人探しから始める。しかも両者とも友人が多くいるわけではないために、介添え人探しに多少難儀している。そして、主人公が朝、介添え人を伴って、侮辱した者の家を訪れる点、武器がピストルである点、主人公が腕に怪我をする点、その怪我した腕をハンカチで縛ってブランデーで湿してもらう点も共通である。

さらに描写の細部に目を向けると、この二つの戦いは、身分を問わず決闘が多く行われていたという当時の社会的趨勢だけでなく、当時の決闘のルール³¹を映し出していることが分かる。まず『赤と黒』では、ジュリヤンの介添え人であるリエヴァンの振る舞いは注目に値する。リエヴァンはボーヴォワジ従男爵がジュリヤンを侮辱した当の本人ではないことが判明すると、「友人のソレル氏は、相手が名刺を盗まれたからといってその人に不当な喧嘩を吹き掛けるような人間ではないと決め込ん³²」で決闘することを一旦は止めさせている。ここではリエヴァンが介添え人としての役割を果たしているのが分かる。結局ジュリヤンとボーヴォワジ従男爵はその日戦うことになるが、これには「閑静な場所」(une place tranquille)が選ばれている点にも、この決闘が当時のルールにかなっていることが見て取れる。

オクターヴの決闘も同様に当時の決闘のルールを伝えている。場所はムードンの森³³、やはり「奥まった場所」(un lieu reculé³⁴)が選ばれる。介添え人はメーラン氏とドゥミ＝ソルドであるドリエ氏³⁵だが、両介添え人の役割も見逃してはならないだろう。介添え人たちは決闘者二人が一発ずつ放った後で、これで決闘を止めさせようとする³⁶。だが、続行を望む決闘者を説き伏せることはできず、

根負けした形ではあるが、ついに再開する許可を与える。また、クレヴロッシュ侯爵が至近距離で撃とうと申し出た時には、介添え人たちは反対してそれを差し止める。介添え人たちが許可を与えたり、申し出を差し止めたりして決闘の進行を見守り、指揮しているのが分かる。『アルマンズ』がただ単に、当時貴族や平民によってしばしば行われていた決闘を取り込むだけでなく、当時の決闘の細部までも描き出すことによって同時代風俗を刻み込んだ小説たらんとしているさまがありありと見て取れる。

(つづく)

註

- 1 Stendhal, *Mélanges I (Politique-Histoire)*, *Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, 1971, t. XLV, p. 177-184, 221-224.
- 2 Moya Longstaffe, «L'éthique du duel et la couronne du martyr dans *le Rouge et le Noir*», *Stendhal Club*, n°72, 15 juillet 1976, p. 283-306. 邦訳は筆者による。以下同様。邦訳にあたり参照した翻訳文献は註の後にまとめて記す。
- 3 Pierrette Pavet-Jörg, «Les duels stendhaliens», *HB*, n°2, 1998, p. 79-89.
- 4 オクターヴの決闘についてはこれまで、その暴力性や攻撃性、身体エネルギー発散の側面や同性愛の側面に光が当てられてきた。ルース・グルーエンは決闘にオクターヴの「暴力的発作」(crises de violence) (Ruth Gruen, «L'impuissance à parler : aspects du discours et du comportement non verbal dans *Armance*», *Stendhal Club*, n°96, 15 juillet 1982, p. 413) のあらわれを見ており、この見解は決闘にオクターヴの攻撃性を認めているジャン＝ジャック・ラビヤの見方 (Jean-Jacques Labia, Introduction à *Armance*, GF-Flammarion, 1994, p. 24) に通ずる。ジョルジュ・ブランはオクターヴが決闘に走ったのはおそらく性的不能ゆえに過剰になっている力、エネルギーを消費するためであろうという見解を打ち出している (Georges Blin, Introduction à *Armance*, Revue Fontaine, 1946, p. LX-LXII)。他方ドミニック・フェルナンデスは、決闘はオクターヴの同性愛を示すと考えている。というのも、オクターヴは同性愛の誘惑から身を守るために、若い男性に対して常に暴力的な態度に出ると考えられるからである。クレヴロッシュ侯爵を殺した後の「主人公の軽蔑的な『冷淡さ』は、『この瀕死の美青年』が呈する光景のエロチックな魅力に対する自己防御反応にすぎないことはこれまで気付かれただろうか。」(Dominique Fernandez, «Le secret d'Octave», *Armance*, P.O.L, 1991, p. XV.)
- 5 Daniel Sangsue, «Stendhal et l'empire du récit», *Poétique*, n° 104, novembre 1995, p. 429.
- 6 *Ibid.*, p. 430.
- 7 Flaubert, *Correspondance*, Bibliothèque de la Pléiade, 1988, t. II, p. 83. ([1852年5月2日] 日曜日, ルイーズ・コレ当ての書簡。)
- 8 Edmond et Jules de Goncourt, *Journal*, Bouquins, 1989, t. I, p. 673. (1861年3月17日日曜日の日記。)
- 9 Gérard Genette, *Figures I*, Points, 1976, p. 243.
- 10 Daniel Sangsue, art. cit., p. 436.
- 11 *Ibid.*, p. 431.
- 12 *Ibid.*, p. 432.
- 13 Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, 2005-2007, t. I, p. 243.
- 14 Stendhal, *Lamiel*, GF-Flammarion, 1993, p. 326.
- 15 *Œuvres romanesques complètes*, t. II, p. 885-886.
- 16 Balzac, *La Comédie humaine*, Bibliothèque de la Pléiade, 1976-1981, t. III, p. 211.

- 17 Stendhal, *Chroniques pour l'Angleterre*, Publications de l'Université des langues et lettres de Grenoble, 1980-1995, t. IV(2), p. 473.
- 18 山田勝『決闘の社会文化史 ヨーロッパ貴族とノブレス・オブリエ』p. 13. (下記の「決闘に関する主要参考文献」を参照のこと。)
- 19 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. II, p. 304. これはスタンダール執筆のフランス語原文である。
- 20 *Œuvres romanesques complètes*, t. I, p. 162.
- 21 *Ibid.*, p. 801.
- 22 *Ibid.*, p. 459.
- 23 *Ibid.*, p. 492.
- 24 ジュリヤンの社会的身分については作品中「木挽のせがれ」(fils du charpentier), 「プチブルジョワ」(petit bourgeois), 「平民」(plébéien), 「召使」(domestique), 「百姓」(paysan) などさまざまな呼称が用いられているが、彼が受けた教育に着目すると、彼は実際にはプチブルジョワである(以下参照。Christine Klein et Paul Lidsky, *Le Rouge et le Noir, Stendhal, Profil d'une œuvre*, 1986, p. 27)。しかし、いずれにせよ、彼が高貴な家の生まれでないことは間違いない。
- 25 『赤と黒』第2部第6章を参照。
- 26 *La Comédie humaine*, t. III, p. 134.
- 27 *Ibid.*, p. 215.
- 28 山田勝『決闘の社会文化史 ヨーロッパ貴族とノブレス・オブリエ』p. 152-188.
- 29 *Œuvres romanesques complètes*, t. I, p. 644.
- 30 *La Comédie humaine*, t. V, p. 1094.
- 31 『パルムの僧院』にはファブリスが決闘の規則をすっかり忘れ、相手にとっさに躍り掛かってしまうシーンがある。「ファブリスは若いジェノヴァ人に決闘の話をするかわりに、短刀を取り出してそのジェノヴァ人に飛び掛かり刺した。」(Stendhal, *La Chartreuse de Parme I, Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, 1969, t. XXIV, p. 149.)
- 32 *Œuvres romanesques complètes*, t. I, p. 591-592.
- 33 この森はジュリヤン、リュシヤン及びラミエルも訪れている。ジュリヤンはこの森の中で馬をギャロップで走らせ(*Ibid.*, p. 676), リュシヤンはこの森を馬を並足にして散歩し(*Œuvres romanesques complètes*, t. II, p. 615, 707), ラミエルはピクニックの際にこの森に入る(*Lamiel*, p. 198)。またスタンダールはムードンを訪れた際、この森を「陰気」(triste) (Stendhal, *Œuvres intimes*, Bibliothèque de la Pléiade, 1981, t. I, p. 702) と形容している(1811年7月6日の『日記』)。
- 34 *Œuvres romanesques complètes*, t. I, p. 188.
- 35 *Ibid.*, p. 187.
- 36 アンリ＝フランソワ・アンベールはこの決闘の無意味さを指摘するドリエ氏に、決闘反対の立場をとっていたスタンダールの代弁者を見ている(Henri-François Imbert, *Les métamorphoses de la liberté ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento*, José Corti, 1967, p. 413)。

決闘に関する主要参考文献

- LAROUSSE, Pierre.- *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle VI*.- Paris : Administration du Grand dictionnaire universel, 1870.- 1470 p.
- MONESTIER, Martin.- *Duels : les combats singuliers des origines à nos jours*.- Paris : Sand, 1991.- 319 p. (モネスティエ (マルタン) 『図説 決闘全書』, 大塚宏子訳, 原書房, 1999年, 457頁。)
- 山田勝『決闘の社会文化史 ヨーロッパ貴族とノブレス・オブリエ』, 北星堂書店, 1992年, 266頁。

参照した邦訳文献

- スタンダール『赤と黒』, 桑原武夫, 生島遼一訳, 岩波書店, 1987年, 2巻, 382+468頁, (岩波文庫)。
スタンダール『赤と黒』, 小林正訳, 新潮社, 1960年, 574頁, (世界文学全集;2)。
スタンダール『アルマンス』, 新庄嘉章, 平岡篤頼訳, 角川書店, 1958年, 294頁, (角川文庫)。
『スタンダール II』, 大岡昇平, 小林正, 富永明夫訳, 新潮社, 1969年, 847頁, (新潮世界文学;6)。
スタンダール『パルムの僧院』, 生島遼一訳, 岩波書店, 1993年, 2巻, 371+401頁, (岩波文庫)。
スタンダール『パルムの僧院』, 小林正訳, 集英社, 1974年, 460頁, (世界文学全集;8)。
バルザック『金色の眼の娘』, 田辺貞之助, 古田幸男訳, 253~316頁, 『バルザック全集』第7巻, 東京創元社, 1987年, 328頁。
バルザック『ゴリオ爺さん』(下), 高山鉄男訳, 岩波書店, 1997年, 262頁, (岩波文庫)。
バルザック『ゴリオ爺さん』, 平岡篤頼訳, 新潮社, 2001年, 396頁, (新潮文庫)。

(たど かなな 総合教育センター)